

2012年 8月3日・「西日本新聞」文化欄では

『脱原発・自然エネルギー 218人詩集』刊行

「声を発した」詩人たち 精神的格闘の姿、世界へ

昨年3月11日の東日本大震災に伴って起きた福島第1原発事故から約1年5カ月。国内外の詩人たちはこの深刻な事故をどう受け止め、どんなメッセージを発してきたかを一望できるアンソロジー『脱原発・自然エネルギー 218人詩集』が出版された。日本語版と英語版を一冊にしたもので、核兵器と原発を持つすべての国の大使館にも郵送するという。

〈「アウシュヴィッツ以後、詩を書くことは野蛮である」とアドルノは言いました。ぼくはこう言い替えたい、「フクシマのあとに声を発しないことは野蛮である」と。〉

音楽家の坂本龍一氏が昨年10月22日に英国のオックスフォード大学ハートフォードカレッジのチャペルで行ったスピーチの一部を、坂本氏の了解を得て序文と帯文にした。

これはドイツの哲学者テオドール・W・アドルノ（1903～69）が1949年に発表した論考「文化批判と社会」の中にある表現で、平たく言えば、アウシュビッツでのユダヤ人大量虐殺をもたらしたのも文化であり、この文化に対する批判を十分にしないままであれば、文化が生み出す詩すらも野蛮と言うほかない、といった意味だった。

この詩集は、公募作と詩人ら編者6人の推薦作からなる。

「予知されていた悲劇」「被曝^{ひばく}した子供たちの未来」「脱原発の神話を」など内容別に11章で構成し、第4章「悲しみの場所・福島」には福島県出身や在住の18人の作品を、最終章「福島に寄せる海外詩人の詩篇」には米国、ドイツ、スイス、イタリア、インド、韓国など海外在住の20編を収録している。

宇宿一成（鹿児島県指宿市）、村永美和子（同県薩摩川内市）、働淳（福岡県大牟田市）、田中詮三（宮崎市）の各氏ら九州在住者の作品も含まれている。

編者の一人で千葉県柏市在住の詩人鈴木比佐雄さんは解説・あとがきで「詩人は四季の訪れや自然の変化を敏感に感ずる人間たちだ。その自然への鋭い観察能力はまた人類や地球の未来への危機や不安を直観してしまう予知能力でもある」とし、「この詩がつなぐネットワークは、福島の悲劇と復興に向かう精神的な格闘の姿を世界に発信することになるだろう」と語っている。（井手俊作）

と紹介されています。